

展示品一覧

協力の諸相 絵図作成

伊能測量隊を迎える各地では測量道具の運搬、宿舎や食事の提供の外に、村高・家数・人数などの書上げとともに、村内の集落の配置、街道、田畑山林の別などを絵図面にして提出することが求められた。

○ 「上野国甘楽郡小幡町参考絵図」 国宝番号：地図・絵図類577

第8次測量の帰路の文化11年5月10日に測量した小幡町（群馬県甘楽町小幡）が提出した絵図。名主と組頭2名が署名捺印している。道と水を色分けしている。

○ 「山城国宇治郡池尾村参考絵図」 国宝番号：地図・絵図類631

第5次測量の文化2年9月25日に測量した池尾村（京都府宇治市池尾）が提出した絵図。道・水・山・居村を色分けしており、庄屋の長右衛門と年番の新右衛門が署名捺印している。

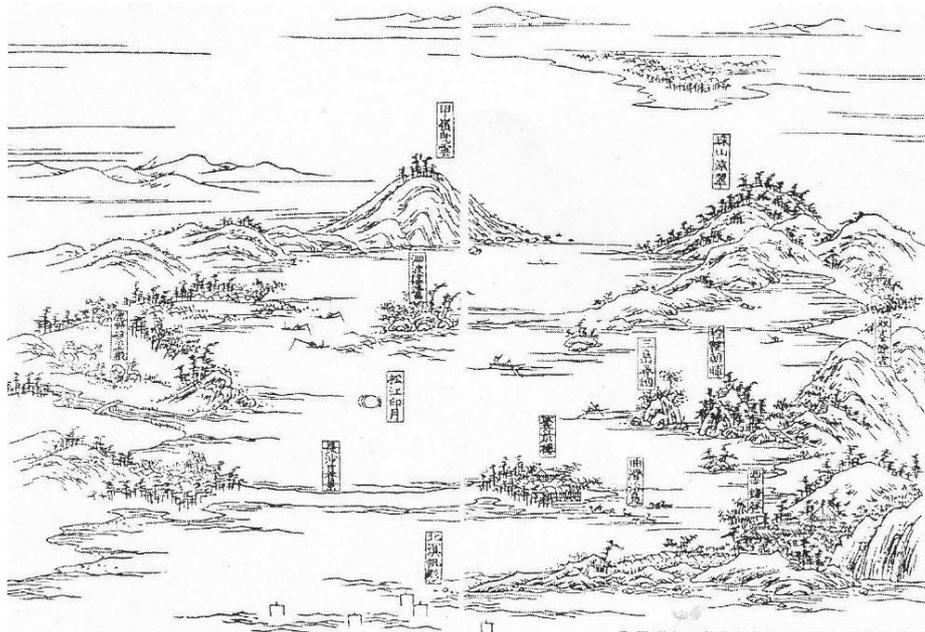
○ 「丹後国久美浜周辺参考絵図」

国宝番号：地図・絵図類632

第5次測量の文化3年8月27日、28日に測量した風光明媚な久美浜湾（京都府京丹後市久美浜）を描いた絵図というよりも絵画である。

『測量日記』では、宿泊した小西与右衛門について、豪家で書画詩文を好み漢詩集『松江近体詩』を著したことなどを詳細に記録している。右の『松江近体詩』附録の「聚景楼十二奇絶山水真図」（『会報』48号45頁）の原画といえるような風景画である。

久美浜測量については『会報』47、48号の松田昭二「久美浜に於ける伊能測量」に詳しい。



○ 「播磨国揖東郡西土井村参考絵図」 国宝番号：地図・絵図類643

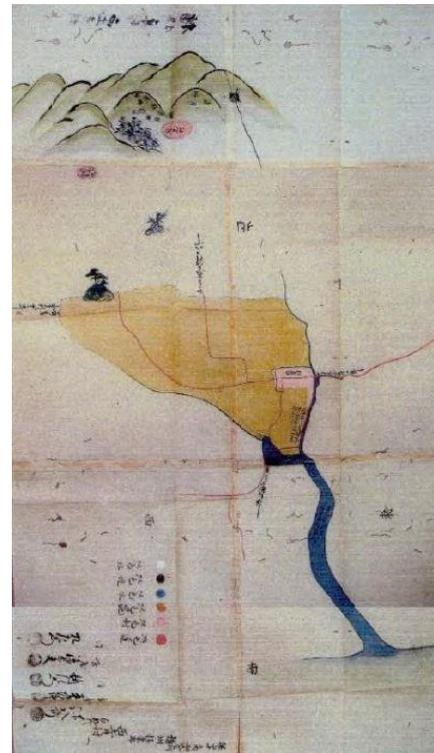
第5次測量の文化2年10月17日に姫路城下を出立した忠敬を途中で出迎えた西土井村（兵庫県姫路市大津区西土井）の庄屋孫太夫らの署名捺印のある参考絵図で、道・村・田地・水・堤・社を色分けしている。『会報』79号62頁で三木敏明氏が地元自治会が所蔵する控図とあわせて紹介している。

参考絵図は1ヶ村単位のもの、とある程度まとまった数ヶ村からなるものがある。西土井村を含む「自播磨国揖東郡西土井村至播磨国揖東郡平松村参考絵図」（地図・絵図類644）などはその例である。そのためか西土井村は測量経路ではなかったが自村の村絵図を提出した。

○ 「豊後国玖珠郡引治村参考絵図」 国宝番号：地図・絵図類764

○ 「豊後国玖珠郡右田村参考絵図」 国宝番号：地図・絵図類765

隣接する引治村と右田村（大分県九重町）の絵図で、文化9年4月と記されており、第8次測量隊が6～7月熊本県から大分県日田に入る前に作成された。ただし測量隊は日田から中津へ抜けたため、この地を測量していない。



○ 「測量日記」(寛政12年閏4月23日)

「寛政十二年庚申 蝦夷于役志 全」 国宝：文書・記録類 番号69

第1次測量の往路、江戸を出立して5日目の白河城下の宿での出会いを、次のように記している。

白河七ツ頃に着。宿因幡屋茂兵衛と云。白河城下にて心當致置候御用宿は、至て小家手狭に付、宿縁替し因幡屋となりし。此主は下総佐原にて丸屋伊右衛門と云ものの酒蔵をかり、丸屋清吉と云て酒造せし人なり。丙午のとし、大坂にて米商に損金をなし、此白河城下へ来りけるよし。不思議に對面、酒肴を以、饗応ありしまま女房へ南簾一片遣しける。此あるじは生国は近江の国なり。

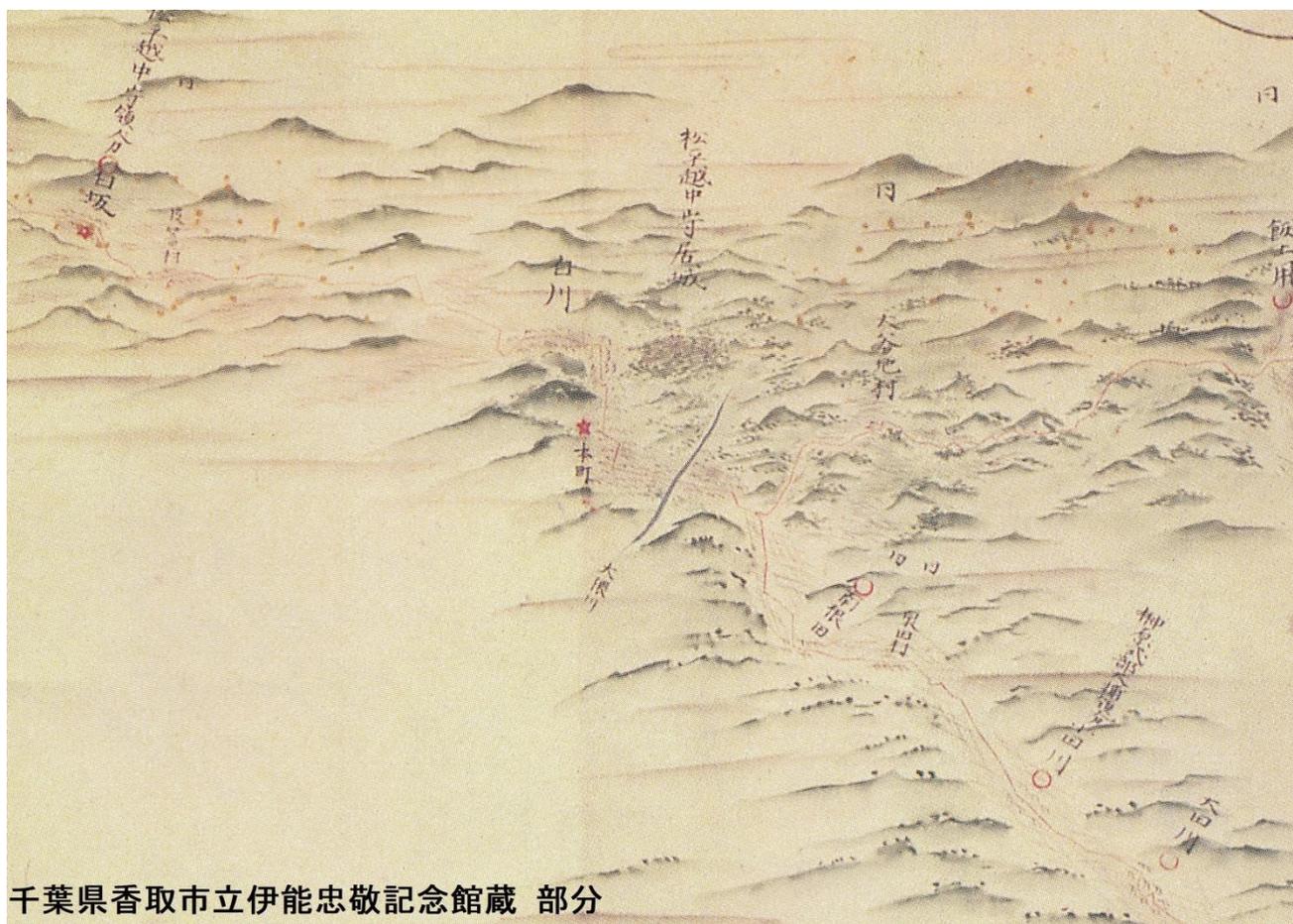
宿の主の因幡屋茂兵衛(丸屋清吉)は「丙午のとし、大坂にて米商に損金をなし」白河城下に来たという。「丙午のとし」とは天明6年(1786)のことで、天明の大飢饉にともない大阪堂島の米相場が大混乱に陥っていた時期である。忠敬が文化9年10月13日付で柳川から妙薫に宛てた手紙によると、忠敬は天明5年に米の値上りを予想して大坂などから米を買入れていたが、予想に反し米価が下落してかなりの含み損になっていた。それでも米を1俵も売らずに抱え、運を天に任せていたところ、天明6年秋を迎えると、利根川の大洪水となった。抱えていた米で窮民を救済することができた上、米価が暴騰して利益を確保できたと記している。この時は忠敬自身も「十ヶ年逼塞」を覚悟しただけに、二人の明暗を分けた「丙午のとし」をめぐって様々な思いが去来したことであろう。

蛇足ながら「寛政十二年庚申 蝦夷于役志」の「于」を「千」と誤記しているケースがある。「于役」とは君命により他国に行くという意味である。

○ (栃木県喜連川・福島県白河)

「奥州街道図 第四〈自喜連川／至矢吹〉」 国宝：地図・絵図類 番号48 縮尺1/36,000

再会の舞台となった白河城下の因幡屋茂兵衛の宿は大図の中央部の本町で★印が押されている。

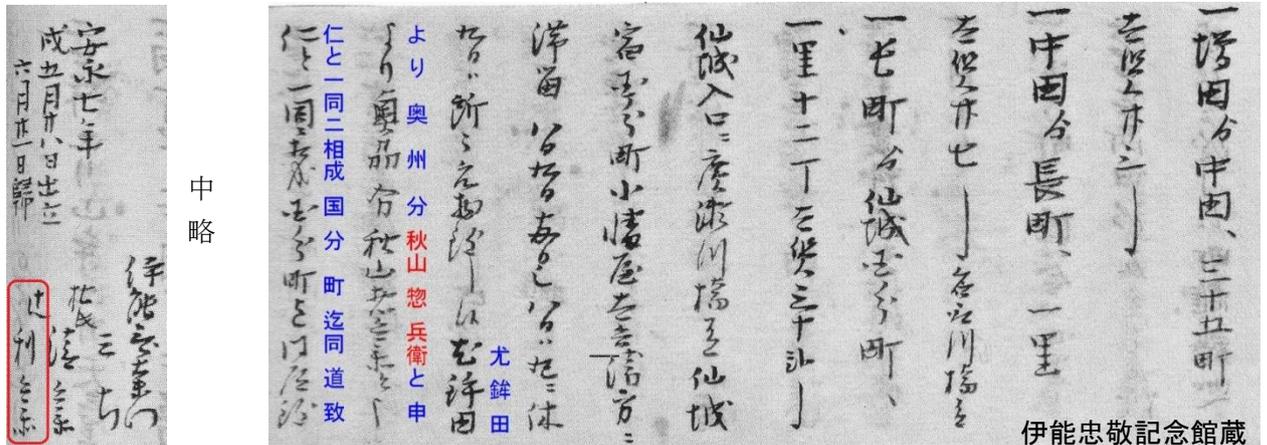


千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵 部分

享和元年9月8日の分浜（宮城県石巻市）の止宿先の秋山惣兵衛との再会のエピソードが紹介されている。結婚16年目の忠敬とミチの夫婦は奥州松島まで旅行した。その際に偶然に同行することになった秋山惣兵衛と、24年ぶりに再会することになった忠敬は「不思議」として『測量日記』に詳細に書き留めている。『奥州紀行』『測量日記』の該当個所が展示されている。

○ 「奥州紀行」 国宝：文書・記録類 番号217

「奥州紀行」については「会報」第83号の前田幸子「奥州紀行を読む」に全文の翻刻と解説がある。「会報」第20号の窪谷悌二郎「伊能忠敬関係史料原文解説誤りに付いて」も参考にする必要がある。



中略

伊能忠敬記念館蔵

文末に同行者として登場する辻利兵衛は近江の出身で、宝暦9(1759)年に佐原村の香取街道に面した伊能家所有の長大な棟割長屋の一角に店借りして植田屋の屋号で開業した。忠敬が寛政元(1789)年7月に記録した「表長屋貸地匱絵図」にその場所や借料が記載されていて興味深い。現在も植田屋荒物店として小野川にかかる忠敬橋のたもとに店を構えている。白河城下の因幡屋茂兵衛もまた近江商人であった。

佐原村にける入込み商人の動向と伊能家の棟割り長屋、忠敬の入込み商人受入れ方針などについては、佐原在住の近世史家酒井右二氏の伊能忠敬顕彰会HP所収の論考が一般向きでわかりやすく参考になる。

[伊能忠敬顕彰会HP > 地域人としての伊能忠敬 > 「第5回 伊能家の屋敷と貸家」など]

展示のタイトルに「伊能忠敬の新婚旅行」と大書されている。「忠敬漁具番伝説」「ミチ悪妻伝説」は払拭されつつあるが、新たな神話が創造され拡散し始めた。

○ 「測量日記」(享和元年9月8日)

「享和元辛酉歳 沿海日記 完」 国宝：文書・記録類 番号71

不思議に、此分ヶ浜なる秋山惣兵衛なる者に舎(とま)り会ぬ。真に深き因縁にてぞありける。終夜往事を語り合い、指を屈すれば安永七戌戌の歳にて二十四年にぞなりける。まじも別離を惜み、此先の泊々二三日の間送別しける。

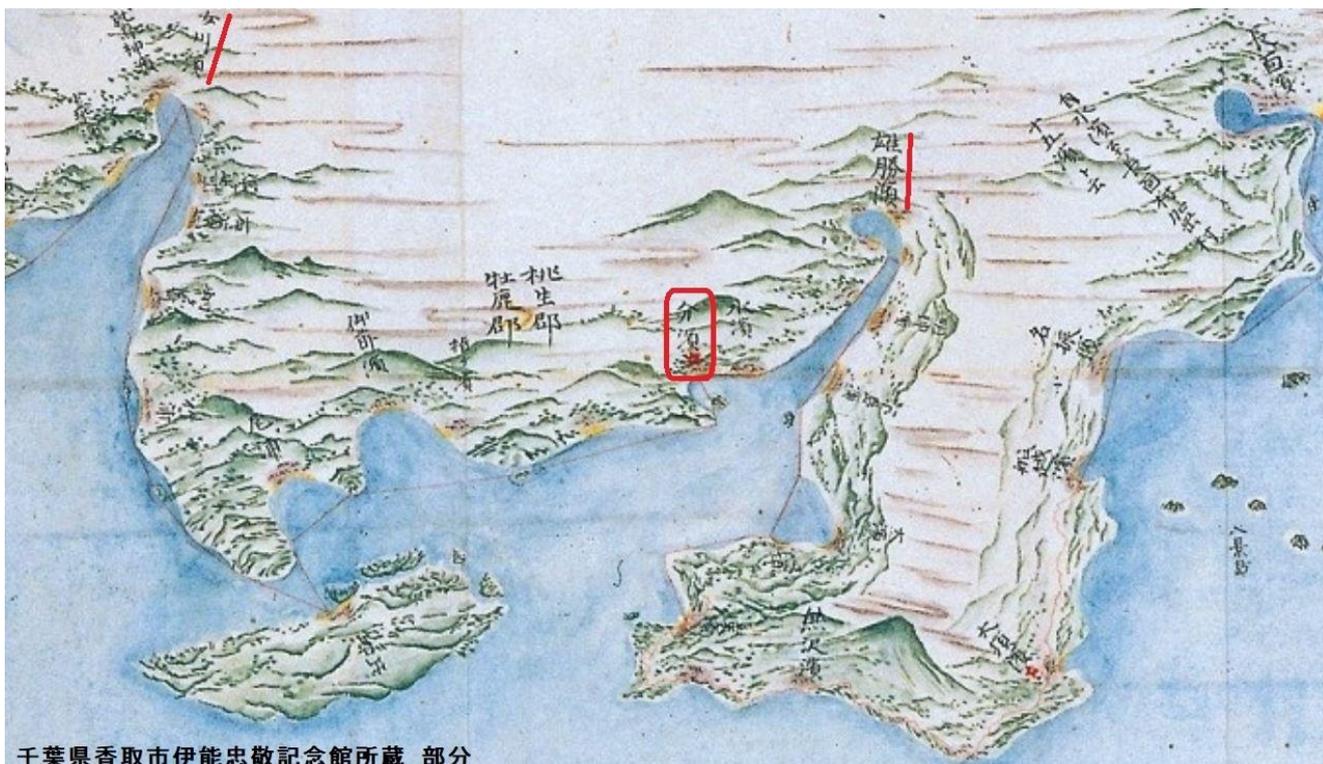
三陸海岸での「測量日記」からは江戸時代の物流をうかがい知ることができる。

- ・ 9月8日の分浜での止宿先の秋山惣兵衛は「交易の事に銚子港」に来た帰路に忠敬・ミチ夫妻と同行した。
- ・ 9月15日の気仙沼の止宿先の日除儀右衛門について、「先年米交易の事にて佐原村へ罷越し」忠敬宅で会ったことがあるといわれ、「不思議の事」としている。
- ・ 9月28日に忠敬もその盛名を知ってわざわざ訪問した吉里吉里村の前川善兵衛は東北地方と江戸を結ぶ東廻り廻船業で財を成していた。

これらのエピソードから浮かび上がるのは、東北地方の諸藩と江戸を結ぶ大きな物流の存在である。東北各地の米穀など諸物資が東廻り航路で銚子港へ、そこで高瀬舟に積み替え、利根川、江戸川、小名木川をへて江戸市中へ、江戸からは下り荷物が各地へ送られる。利根川下流の水運の中心地である佐原の豪商であった忠敬が三陸海岸を測量すれば、各地の江戸廻米の担い手たちに出会うことは当然のことであった。

○ 大図（宮城県：石巻～牡鹿半島～雄勝～岩尻）

「自江戸至奥州沿海図 第十一 〈自石巻／至岩尻〉」 国宝番号：地図・絵図類 67 縮尺1/36,000



千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵 部分

享和元年9月8日に女川浜を出立してから9月10日の長面浜までの測量の範囲である。ここでは海上の朱色の測線が目立ち、陸地に測線は少ない。日記には連日のように「船中引縄にて測る」と記されている。

協力の諸相 器具運搬

器具の運搬に尽力した各地の人々

○ 「測量日記」（享和2年9月20日）

「享和二壬戌歳沿海日記」 国宝：文書・記録類 番号72

忠敬が越後国岩船郡の村人たちを「人品古風にして敦朴なり」「真実」と賞賛したことを測量日記から紹介している。

この地域の海岸は右の大図からもわかるように、山が海に迫り奇岩・怪岩・孤島・洞窟の海岸が11km続き「笹川流れ」として知られている。9月19日の測量日記では「舟にて海岸海中を望めば奇岩奇石おほく、山麓岩上の奇松、絶景無類なり」と絶賛している。しかし、海岸測量にとっては「大難所」であり、6月に測量御用の御触れが届くと、村々では「山坂難所の道路を盆中の遊に普請し、或は新道を造り」準備した。さらに険阻で馬の通れる道もないので、長持ちの荷物は取り出して分けて、空の長持と共に人力で運ぶというのである。幸いなことに、この地域を測量した3日間は風波も無かったので、荷物は舟で村継ぎで送ることが出来て負担を軽減できた。忠敬は「是は村々真実の徳ならんと感じけり」と感想を記している。



○ 大図（新潟県：村上）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第二十〈自網代／至大川〉」

国宝：地図・絵図類 番号36 縮尺1/36,000

「大難所」も岩ヶ崎で終り、三面川を渡り瀬波村から風景が一変し、海岸砂丘列が続くなだらかな砂浜が始まる。岩ヶ崎までの崖の緑から、砂浜の黄へと描き分けられている。岩舟には琵琶瀉(岩舟瀉)とよばれる瀉湖が描かれているが現在は埋め立てられて存在しない。

瀬波の境で測量隊を出迎えた岩船町の記録を詳細に紹介したのが『会報』43～46号に連載された風間公吉氏の「越後岩船測量」である。それによると、道路の清掃補修に10人、測量手伝い人足が14人、御駕籠に8人、御両掛に2人、御長持に16人、小もの持が8人動員されている。

岩船には★印があるが、これについては別冊太陽『伊能忠敬』の70頁に「越後岩船町の位置が刻まれた夜」として感動的に記されている。



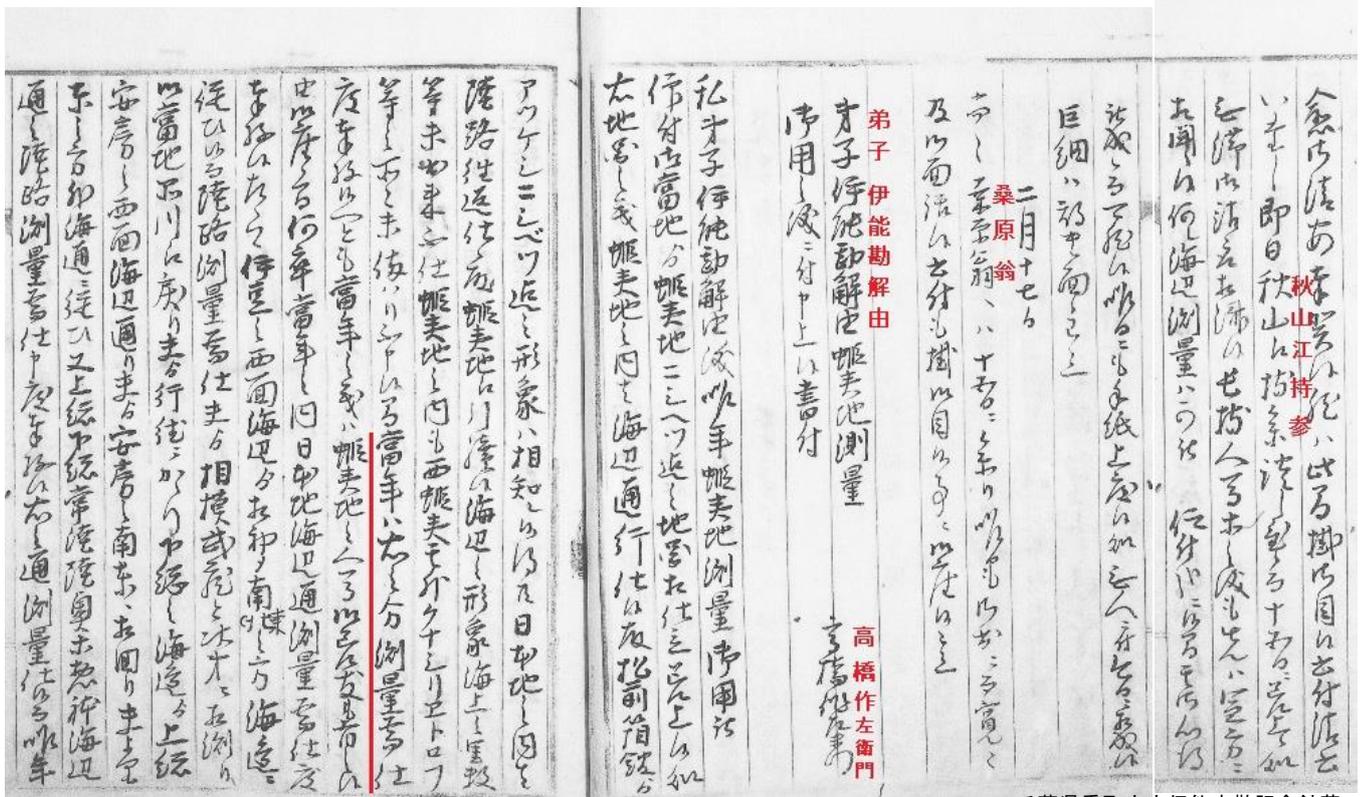
千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

協力の諸相 内なる協力者

伊能忠敬を支えた上司、弟子、職人たちを文書で紹介している。

○ 「測量日記」(寛政13年2月 第二次測量をめぐる幕府との折衝)

「寛政十三辛酉年御用留日記」 国宝番号：文書・記録類70



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

第二次測量の行き先を巡る幕府との折衝と高橋作左衛門（至時）からの本州東海岸測量申請の書付を紹介している。高橋至時は、事前に奥右筆組頭の秋山松之丞に書付を持参して相談し、幕閣へ根回しをしている忠敬の岳父の桑原隆朝にも相談したうえで、「蝦夷地の人馬に差支えがある」として蝦夷地測量を断念し、伊豆以北の本州東海岸測量申請の書付を提出した。

○ 「高橋御用日記」(文化2年12月) 国宝番号：文書・記録類204

○ 「高橋御用日記」(文化3年6月) 国宝番号：文書・記録類205

3年程度で西日本測量を終えるという第五次測量の計画は紀伊半島測量で破綻した。「高橋御用日記」では、西日本測量の計画変更を巡って二十歳過ぎの高橋景保の健闘する様子とともに、景保を後見する間重富、桑原隆朝や奥右筆組頭秋山松之丞、若年寄堀田正敦の動向がうかがえる。「高橋御用日記」は『会報』32、66～68、70、73号に紹介されている。

展示されているのは文政3年2月に承認された尾形慶助と門倉隼太の増員が認められた「西国筋海浜測量御用御増人之儀奉願候書付」の部分と、尾形と門倉を増員した際の「請取申金子之事 内弟子二人御手当」に関する部分である。

伊能忠敬を支えた内弟子や天文方下役を測量日記で紹介している。

○ 「測量日記」(享和3年2月25日)「享和三癸亥歳沿海日記 上」 国宝番号：文書・記録類73

第4次測量の出立の様子から「門人平山藤右衛門」を紹介。

○ 「測量日記」(文化2年2月25日)「乙丑丙寅沿海日記 元」 国宝番号：文書・記録類75

第5次測量の出立の様子から「内弟子平山郡蔵」を紹介。

○ 「測量日記」(文化5年1月25日)「戊辰沿海日記 上」 国宝番号：文書・記録類79

第6次測量の出立の様子から「内弟子稲生秀蔵」を紹介。

○ 「測量日記」(文化6年8月27日)「測量日記 一」 国宝番号：文書・記録類81

第7次測量の出立の様子から「内弟子梁田栄蔵」を紹介。

○ 「測量日記」(文化8年11月25日)「九州測量日記」 国宝番号：文書・記録類85

第8次測量の出立の様子から天文方手付下役の「永井甚左衛門」と「門谷清次郎」を紹介。

○ 「測量日記」(文化2年2月25日)「乙亥丙子量地日記 天」 国宝番号：文書・記録類94

第9次測量の出立の様子から天文方手付下役の「永井甚左衛門」と「門谷清次郎」を紹介。

○ 「封廻状」 『世田谷伊能家伝存 伊能忠敬関係文書目録』103-4

国宝ではないが、忠敬を支えた高橋景保や天文方下役のシーボルト事件での処分を紹介している。『会報』8号に「封廻状」の翻刻が掲載されている。

伊能忠敬を支えた職人大野弥五郎・弥三郎親子を紹介している。

○ 「覚(金子請取)」 国宝番号：文書・記録類341

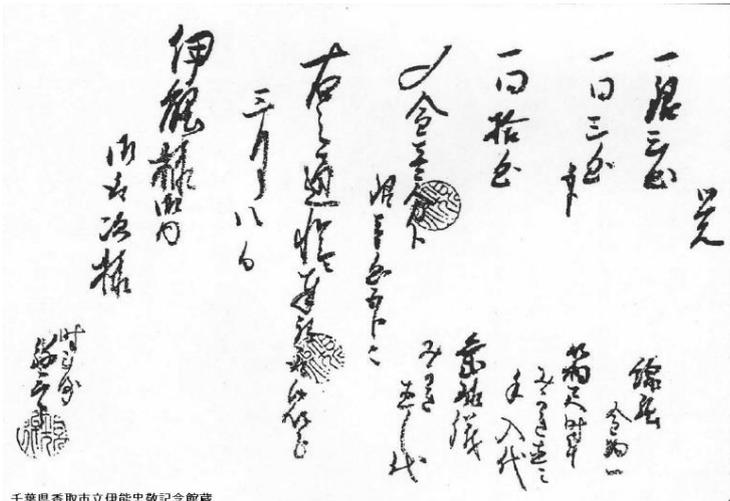
享和元年4月1日付けで「時計師弥五郎」が「伊能勘解由様」宛に出した、時計と半円方位盤の代金の「申・酉兩年分四拾壹両」の金子請取である。忠敬といえども高額であることからか、「申四月 一金四両 請取申候」「申十月廿六日 一金五両 請取申候」とあるように分割払いであった。

○ 「覚(時計代金請取)」 国宝番号：文書・記録類342

内容は、神田の大野弥三郎が、「板付時計代」として一金五両を慥かに請け取ったというものである。

○ 「覚(線張・箱尺時計ミカキ直し・垂球儀みかき直し代請取)」 国宝番号：文書・記録類343

3月8日付で「時計師弥三郎」が「伊能様 御内御取次様」に出したもの。「板付時計」も「箱尺時計」も現存していない。



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵